

ベトナム語におけるフランス語のレガシィ

田原 洋樹¹

要 旨

ベトナム語には、比較言語学上で語族が異なるフランス語を起源とする語彙群がある。その数は、フランス植民地時代に入ってきた語、さらにはフランスからの独立後に取り込んだ科学技術語彙を中心におおむね1000語と考えられている。戦中戦後の社会変化や世界『英語化』の流れの中で、フランス語起源語を取り巻く環境は激変して、消滅した語もある。

本稿では、旧ベトナム共和国時代の言語動態を記憶する人々へのインタビューと、印刷物の分析によってフランス語起源語を抽出してリスト化し、使用環境や用法を考察した。

【キーワード】 フランス語起源語 ベトナム共和国 正書法 ハイフン

1. はじめに

ベトナム語の語彙を語るとき、それが教室であれ、研究の一局面であれ、避けて通れないのが漢越語とフランス語起源語である。

前者は *từ Hán Việt* と呼ばれる、漢語に起源を持つ語で、政治経済および社会科学に関する語彙のおおよそ6割を占める。富田（1988）は「その圧倒的多数の借用語を中国語（漢語）に負っている。それらは、いわゆる基礎語彙とよばれる語彙から、高度な文化語彙まで、実に広範囲に及んでいる。それらの語彙の、固有ヴェトナム語語彙に対する割合は、日本語における漢語からの借用語の割合を、はるかにしのいでいるものと思われる」（1）と述べ、この認識はベトナム国内外の言語学者にほぼ共通している。なお、漢語に起源を持つことが即ち中国語からの直接移入を意味するわけではなく、例えばベトナムの正式国名であるベトナム社会主義共和国を意味するベトナム語 *Cộng hòa Xã hội chủ nghĩa Việt Nam* において、*cộng hòa*（共和）、*xã hội chủ nghĩa*（社会主義）はともに和製漢語が中国語経由でベトナム語に浸透したものである。

他方で、フランス語に起源を持つ語は *từ gốc Pháp* と総称され、フランス植民地時代に持ち込まれたフランス語がそのまま、あるいはベトナム語化されて定着した語である。ここ数年、筆者がベトナム語の会話で用いるフランス語起源語が、ベトナム人の若者に「通じない」ことがあった。漢越語やフランス語起源語ではない、純粹ベトナム語への置き換えが進んでいるのだろう。他方で、ベトナム国内、とりわけ南部の壮年や老人（サイゴン陥落以前に出生し、旧ベトナム共和国で成長した者）や、アメリカ合衆国カリフォルニア州の「リトルサイゴン」と呼ばれる地区のベトナム系住民のコミュニケーションでは引き続き多くのフランス語起源語が使用されている。

筆者は1991年に東京でベトナム語学習を始めて、92年から93年までホーチミン市総合

¹ 立命館アジア太平洋大学（APU） 准教授

e-mail:tahara@apu.ac.jp

大学（現在のホーチミン市国家大学）に留学した。その後は96年から3年間ハノイの日本国大使館に勤務したが、筆者のベトナム語能力の基礎は留学時代に築いたと言える。筆者がベトナム語を学習してきた四半世紀で、ベトナム国内でのフランス語起源語を取り巻く環境に変化があったと推測でき、それを自己の学習史およびベトナム語運用経験に照らし合わせて研究していくことが、既に一部で遺産化しているフランス語起源語の記録になるのではないかと考えた。

2. 日常生活の中のフランス語起源語

ベトナムでの日常生活を考えると、出勤前のコーヒー、通勤通学手段として都市部で定着しつつあるバス、宴席には欠かせないビールのすべてがフランス語起源語である。これらはベトナムにもともと存在していたものではなく、フランス植民地支配とともにベトナムに持ち込まれたものであり、フランス語起源語と呼ぶのは蓋し当然だ。

ベトナムを代表する麺料理のひとつであるフォーはまた朝食の定番だが、この語源には複数の考察がある。広東語由来の *ngư nhục phân*（牛肉粉）の *phân* がベトナム語化したという説、フランス語の *pot-au-feu*、すなわちポトフの第三音節がフォーになったとの説など、フォーそのものの起源が明らかではないのと同様に、語源も不明である。1896年に刊行された *Đại Nam Quốc-Âm Tự-Vị* 『大南国音字彙』には *phở* の記載はなく、*Vương Toàn* は1907年の *Essai sur les Tonkinois* でも触れられていないと指摘している(2)。一方で、現代作家の *Thạch Lâm* は “*Hà Nội ba mươi sáu phố phường*” で、ハノイでは「人々は朝に、昼に、夜にフォーを食べる」と書いている(3)ので、彼の生前、つまり1942年までにはフォーがハノイの食生活に定着していたことが分かり、合わせて *phở* というベトナム語の発生と定着も読み取ることができる。

西洋を意味する *Tây* 「西」は漢越語であるが、この語は西洋全体を指す意味以外にも「フランス」を意味する。*Nguyễn Hữu Phước* は「年長者が *Tây* という語を耳にしたときはフランス人ないしフランス国のことだと理解する」と述べている(4)。ベトナムの格言 *Ăn cơm Tàu, ở nhà Tây, lấy vợ Nhật*.（食うなら中華料理、住まうならフレンチビラ、娶るなら日本人）においても *Tây* が使われているが、これは西洋一般を意味するのではなく、フランスの意である。

日本語では英語に由来するエイズ (AIDS; Acquired Immune Deficiency Syndrome) やデオキシリボ核酸 (DNA; Deoxyribonucleic Acid) などは、それぞれフランス語の *syndrome d'immunodéficience acquise* に由来する *SIDA* と呼び、後者は *acide désoxyribonucléique* による *ADN* が一般的である。なお、ベトナム語で使用されるアルファベットの各字母は、例えば *A*, *B*, *C* が [a], [be], [se] である。

フランス語起源語のうち、約70%が科学技術や学術研究に関連する語とされ(5)、上述のように日常生活で出会うフランス語起源語はむしろ少数である。ただ、現実の言語生活を考えると、科学技術用語や学術用語は頻繁には使用しない一方で、衣食住に関わる基本語の中のフランス語起源語は、そのバリエーションは少なくとも、いわば「朝起きてから夜寝るまで」高い頻度で使用されている。よって、どうしても見え方に偏りが出てしまうのだ。

そこで、ベトナムでの日常生活で使用するフランス語起源語をまとめたのがリスト1である。外来語ゆえにベトナム語表記に揺れがあり、国内外で発行されている辞書の見出し語を見ても統一感がない。本リストでは新聞雑誌などで一般的に用いられているものを採用している。

リスト1 日常生活で用いるフランス語起源語

フランス語起源語<元のフランス語：ベトナム語での意味

alô<allo:もしもし	ca ve< cavalière:カラオケ屋などの接客婦
amidan< amygdale:扁桃腺	ca vát, cà vạt< cravat:ネクタイ
atiso< artichaut:アーティチョーク	cà phê< café:コーヒー
ãn ten< antenne:アンテナ	cà rốt< carotte:ニンジン
ấn quy< accu:バッテリー	cà ri< cari:カレー
ba lô< ballot:リュックサック	cạc< carte:カード
ba tê (patê)< pâté:パテ	cao su< caoutchouc:ゴム
băng< bande:包帯、带状の物	cáp< cable:ケーブル
bê tông<béton:コンクリート	căn tin< cantine:カフェテリア
bia< bière:ビール	compa< compas:コンパス
bích quy< biscuit:ビスケット	com lê< complet:上下揃いのスーツ
bi da< billard:ビリヤード	cua< cours:授業 *cúp cua「授業をさぼる」
boa< pourboire:チップを渡す	cúp< couper: カットする、切断する
bom< bombe:爆弾	dăm bông< jambon: ハム
bóp< porte monnaie:財布	đầm< dame:ドレス
bơ< beurre:バター	ga< gare:駅
bơm< pompe:ポンプ、ポンプで吸い上げる	ga< gaz:ガス、気体。バイクのスロットル
búp bê< poupée:人形	ga lăng< galant:女性に優しい
buýt, xe buýt< autobus:バス	ga ra< garage:ガレージ、車庫
ca< quart:勤務時間、シフト。マグカップ	ga tô< gâteau:ケーキ、洋菓子
ca cao< cacao:カカオ、ココア	gác< garde:ガードマン
ca nô< canot:カヌー	găng< gant:手袋
ghi đông< guidon:ハンドル	pho mát, phở mai< fromage:チーズ
học môn< hormone:ホルモン	pin< pile:電池
inox< inoxydable:ステンレス	pô< pose: (写真の) コマ
kem< crème:クリーム、アイスクリーム	rô ti< rôti:炙る
két< caisse: (ビールなどの) ケース	rượu vang, vang< vin:ワイン

la va bô< lavabo:洗面台	sa bô chê< sapotier:サポジラ (果物)
len< laine:羊毛、ウール	sạc< charger:充電する
lít< litre:リットル (度量衡)	séc< chèque:小切手
lô tô< loto:ロト (数字を当てる宝くじ)	sô cô la< chocolat:チョコレート
lốp< envelope:タイヤのチューブ	sơ mi< chemise:シャツ
lúp< loupe:ルーペ	su hào< chourave:カブカンラン (野菜)
ma cô< maquereau:女衛	tách< tasse: (コーヒーカップの) ソーサー
mét< mètre:メートル (度量衡)	tem< timbre:切手
mì ca< mica:雲母,セルロイド	tuýp< tube:チューブ
mô đên< modèle:流行のスタイル	va li< valise:スーツケース
mô tô< motorcycle:自動二輪	va ni< vanilla:バニラ
mốt< mode:流行ファッション	vang< vin:ワイン
mù tạc< moutarde:マスタード	vét< vest, vét tông< veston:ジャケット
neon< néon:ネオン	xa long< salon:ソファ
ni long< nylon:ナイロン	xà bông, xà phòng< savon:石鹸
noen< noel:クリスマス	xà lách< salade:サラダ
nui< nouilles:マカロニ	xăng< essence:ガソリン
oxy< oxy:酸素	xếp, sếp< chef:ボス, 上司
ô tô< automobile:自動車	xi< cire:ワックス、ワックスをかける
ốp la< œuf au plat:目玉焼き	xi măng< ciment:セメント
ốp lét< omelette:オムレツ	xi nê< cinema:映画
pa tê< pâté:パテ	xích lô< cyclo:シクロ (三輪タクシー)
pê đê< pédéraste:肛門性交愛好者	xiéc< cirque:サーカス
phanh< frein:ブレーキをかける	xót< sauce:ソース (料理)
phim< film:映画、フィルム	xúp, súp< soupe:スープ
phin< filter:フィルター	

このリスト(6)を見ると、現在も使用されている語、すなわちベトナム語に置き換えられず、あるいは外来語であることすら意識されずに定着している語が多く観察される。一方で、このリストから外れている語や辞書の見出し語や書籍から姿を消してしまっている語の『存在』も明らかになってくる。Nguyễn Hữu Phướcは前掲書で「約100年のフランス支配の影響」を受けた語彙について「現在45歳から75歳以上の世代(7)にとって、何度も読んだり聞いたりする機会があった語だ。また、毎日の生活で使っていた語でもある。し

かし、かつて日常的に使っていた、このような語の一部は、今では誰にも振り向かれな
い。また、国内の一部、あるいは外国でのみ使用されている語もある」と指摘している。
リスト2は90年代前半には30代から40代の人々が日常生活で使用していて、現在ではほ
とんど使用されていない語をまとめたものである。

リスト2 1975年以前には一般的に使用され、現在は使用されていない語 (8)

フランス語起源語<元のフランス語: ベトナム語での意味

ãng-kết< enquête: アンケート

cà-vet< catre verte: (車両の) 所有証明証

Ăng-Lê< anglais: イギリス

lê-ghim< légume: 野菜

ba-tui< patrouille: パトロール

xuyêt< sur: 番地表記の/

bãng< banque: 銀行

例えば57/34を現在は57 trên 34と読むが、90年代前
半までは57 xuyêt 34と読む人が多かった。

bôm< pomme: りんご

cà rá< carat: ダイヤモンド、指輪

cà-rem< crème: アイスクリーム (9)

1975年以前にはĂng-Lêはnướcと結びついて英国となり、người Ăng-Lê (イギリス人)
やtiếng Ăng-Lê (英語) のような語句も使われていた。現在は漢越語のAnhに収斂してい
る。bãngは同音異義語があるので、区別するためにnhàを前置してnhà bãngの形で使われ
ることが多かった。

なお、新語の発生に関して、Trần Thị Tinh(10)は、新聞雑誌では形態素レベルでのフラ
ンス語や英語からの造語があることを指摘している。

siêu âm <supersonique: 超音波

siêu thị <supermarket: スーパー

ただし、siêu thịは「超市」の漢越語とする考えが多い。スーパーマンを意味するsiêu
nhân「超人」も同様で、siêu thịやsiêu nhânが直ちにフランス語や英語からの外来語だと
する考えには首肯できない。なお、形態素レベルの造語力そのものは否定すべきではな
く、フランス語起源ではないが、

siêu chỉnh <hypercorrection: 過剰修正

のような新語発生のメカニズムは押さえておきたい。

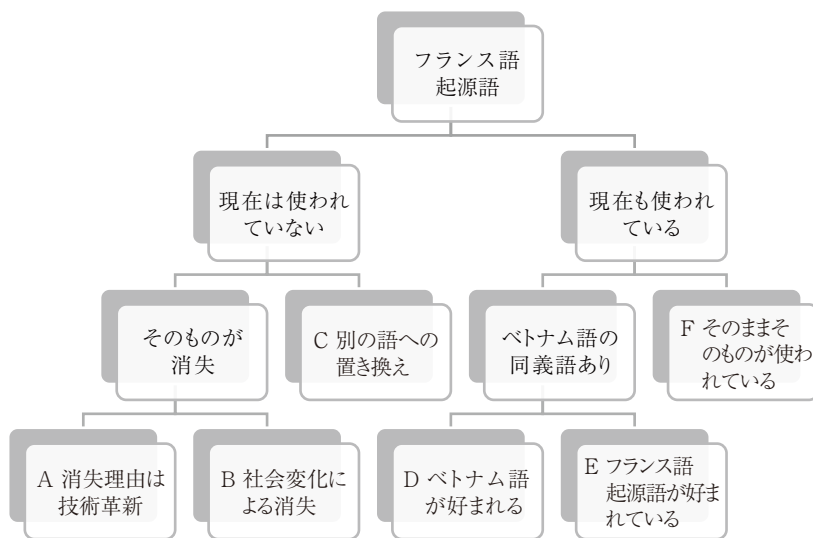
また、「名刺」を意味する語はdanh thiếpまたはcard visitである。後者の語源は一考に値
する。今日、一般的に定着している綴りはcard visitであるが、carte de visiteがベトナム語
に入り、まずはcác visitまたはcác visitと発音された。筆者の経験では90年代前半はほと
んどこのどちらかで、2000年代には発音はそのままに、英単語のcardとvisitを組み合わ
せたcard visitが出現し、現在に至っている。語彙は英語に取って代わられたものの、フラ

ンス語の語順が残っている点が興味深い。

3. フランス語起源語が与える印象

これまで見てきたフランス語起源語を、現在も使われているかどうかという点から掘り下げてみると、図1のように分類することができよう。

図1 フランス語起源語の分類



使われていない語群には「そのものがなくなった」名詞が多く、さらにその消失の理由は技術革新と戦争およびその後の社会変化に区分することができる。戦争を含めて社会変化によって消失した語(B)と、ベトナム語に同義語があり、かつフランス語起源語よりもベトナム語が好まれる語(D)に関しては、純粹ベトナム語への置き換えを奨励

する言語政策も関係している。

筆者がかなり意識的に会話に(E)群の語を盛り込んでみたところ、60代の国内在住女性には懐古趣味だと指摘され、30代の国内在住女性には「老人と話しているみたいだ」との感想を得た。アメリカ生まれのベトナム系青年が本国に帰国した際、家庭における両親や親族との会話と同様に話したところ、「見た目は若いのに年寄りみたいな単語選択だ」と笑われたエピソードも聞かされた。

他方、別のアメリカ在住ベトナム系言語学者(60代)は、フランス語起源語の使用について、一概に懐古趣味とは言えないのではないかと疑問を呈している。自由なサイゴン時代を懐かしむ風潮は当然ながらベトナム系住民の中に強くある。それは『赤い語』の排除やサイゴン時代の語法(10)の意図的な使用であり、また、サイゴン陥落以前の教育制度や新聞雑誌、さらには街の風景を懐かしむことである。しかし、それは単に「昔は美しかった」と懐かしむだけではなく、むしろ現体制への批判や嫌悪感がフランス語起源語を多用することに繋がっていると考えられ、ひとことで懐古主義であると断ずることができない。

では、現実問題として、フランス語起源語を多用する人、いわば愛用者はいかなる動機や背景を持つのだろうか。75年以前のサイゴンでは英語と並んでフランス語があらゆる公共の場面で使用されていた。中等教育でのフランス語教育も盛んだった。サイゴンの中流階級や上流階級に属する人々は日常的にフランス語を話していたし、ベトナム語の会

話にもフランス語の語彙を取り込んでいた(12)。つまり、フランス語の語彙をそのまま使う、あるいはベトナム語の音韻に合わせて発音したフランス語起源語を会話に多用することは、自らのエスタブリッシュメントをさりげなくアピールする行為でもあったのだ。さらに、当時の言語状況をよく知る人物は「中流や上流でない人々も、そこへの憧れや、自分の育ちをよく見せるためにフランス語起源語を会話に多用していた」ことを証言した。このあたりは、会話の中に矢鱈と英語を紛れ込ませて、自らをグローバルな人間だと誇示したがる今日の日本人にも通じる、人間の虚栄を思い出させる。したがって、フランス語起源語を意図的に多用した会話は、単に懐古主義だとか、老人のような話し方だ、という分析に留まらず、話者が自らを「社会の流行に敏感で洒落た、ちょっと違う」人間であることを匂わせ、時には「嫌味で、鼻持ちならない」人物であるとの印象をも与えたことを明記しておきたい。

この種の「ちょっと違う」感は表記にも表れている。ハイフンの使用である。現在、ベトナム本国で一般的な正書法では、外国語の多音節語を筆記する際に、音節間にハイフンを使用せず、スペースを空ける「分かち書き」をするか、あるいは英語の綴りをそのまま使用することが多い。しかし、旧南ベトナムでは、多音節の外来語は音節間をハイフンで結んでいた。bi da (ビリヤード) はbi-daと、căn tin (カフェテリア) はcăn-tinと書くことが一般的だった。ハイフンによりフランス語起源語をはじめとする外来語が見た目の点で際立っていた。むろん、漢越語についても同様で、国名「ベトナム共和国」も Cộng-Hòa Việt-Namとハイフンを使用するのが正式であった。なお、カリフォルニア州で発行されているベトナム語の書籍には、今もこのスタイルを貫いているものがある。

4. まとめ

これまで見てきたように、フランス語に起源を持つ語は科学技術分野の専門用語のみならず、ベトナム人の日常生活において欠かすことができない基本語彙として溶け込んでいる。純粋ベトナム語への置き換えができない語や、多くのベトナム人がフランス語起源語だと気づかずに使っている語もあり、その定着度の深さがうかがえる。

他方で、フランス語起源語を意図的に多用する行為には、御洒落やハイカラな印象を与えるのみならず、自分がフランス語に明るい中流ないし上流社会に属する人間であることをさりげなくアピールする意味合いもあり、往時のサイゴンの言語動態を考える上では大変に興味深い。

本稿では触れなかったが、フランス語の語彙がベトナム語に取り込まれる過程で生じる音変化のルールには、複合子音の変化、語末子音（特に閉鎖音の場合）の声調化が挙げられる。さらに地域差の存在、ことに南北の方言差が反映されている点も面白く、音変化については稿を改めることとしたい。

謝辞

本件論文は科学研究費補助金基盤研究C（課題番号：15K02508『東南アジア語圏におけるヨーロッパ系言語との接触・混成現象に関する動態的記述研究』研究代表者：黒沢直俊・東京外国語大学教授）および2016年度立命館アジア太平洋大学学術助成による成果の一部である。

また、論文の内容には、2016年12月2日に東京外国語大学語学研究所において開催された『アジアの少数言語と言語教育』研究会で「ベトナム語教育における heritage と legacy」と題して口頭発表したものを含む。この発表に際しては、立命館アジア太平洋大学学会発表補助制度の適用を受けた。

注

- (1) 富田健次「ヴェトナム語」, 『言語学大事典』(上), 三省堂, 1998.
- (2) Vương Toàn, *Tiếng Việt trong tiếp xúc ngôn ngữ*, NXB Dân Trí, 2010. p28.
- (3) Thạch Lam, *Hà Nội ba mươi sáu phố phường*, NXB Đời nay, 1943.
- (4) Nguyễn Hữu Phước, *Tiếng Việt gốc ngoại quốc*, 2008. p220.
- (5) Hoàng Xuân Hãnは *Danh từ khoa học* の第2版(1948)に約6000語のフランス語起源の学術用語を収録している。
- (6) 本リストでは、新聞雑誌などで一般的に用いられる表記を採用した。
- (7) 初版当時の記述である。
- (8) 例えば、Thanh Nghị, *Từ Điển Việt Nam*, Khai Trí, 1958. や、Nguyễn Đình Hòa, *Vietnamese- English Student's Dictionary*, The Vietnamese American Association, 1969. には見出し語として採用されながら、現在ベトナム国内で流通している国語辞典には採録されていない語。なお、当リストは旧南ベトナムで通用していた正書法に依拠している。
- (9) 現在では kem がクリームとアイスクリームの両方を意味する。
- (10) Trần Thị Tinh, *Việt hóa từ tiếng Pháp, tiếng Anh trên báo chí tiếng Việt hiện nay*, *Tiếp xúc ngôn ngữ ở Việt Nam*, NXB Khoa học xã hội, 2005. p79.
- (11) 田原, 2016. 参照。
- (12) 2016年6月、カリフォルニア州サンディエゴにおけるベトナム系住民たちへの聞き取り調査による。

参考文献

- (1) Bùi Khánh Thế, *Lý thuyết tiếp xúc ngôn ngữ và vấn đề tiếp xúc ngôn ngữ ở Việt Nam*, *Tiếp xúc ngôn ngữ ở Việt Nam*, NXB Khoa học xã hội, 2005.
- (2) Nguyễn Hữu Phước, *Tiếng Việt gốc ngoại quốc*, Nhà sách Tự Lực, 2008.
- (3) Nguyễn Quảng Tuân và Nguyễn Đức Dân, *Từ điển các từ tiếng Việt gốc Pháp*, Hội Nghiên cứu và Giảng dạy Văn học TPHCM, 1992.
- (4) Trần Thị Tinh, *Việt hóa từ tiếng Pháp, tiếng Anh trên báo chí tiếng Việt hiện nay*, *Tiếp xúc ngôn ngữ ở Việt Nam*, NXB Khoa học xã hội, 2005.
- (5) Vương Toàn, *Từ gốc Pháp trong tiếng Việt*, NXB Khoa học xã hội, 1992.
- (6) Vương Toàn, *Tiếng Việt trong tiếp xúc ngôn ngữ từ giữa thế kỷ XX*, NXB Dân Trí, 2011.
- (7) 田原洋樹「ベトナム語における『黄色い語』と『赤い語』に関する考察」, 『A P U 言語教育論叢』1巻, 立命館アジア太平洋大学言語教育センター, 2016.
- (8) 富田健次「ヴェトナム語」, 『言語学大事典』(上), 三省堂, 1998.